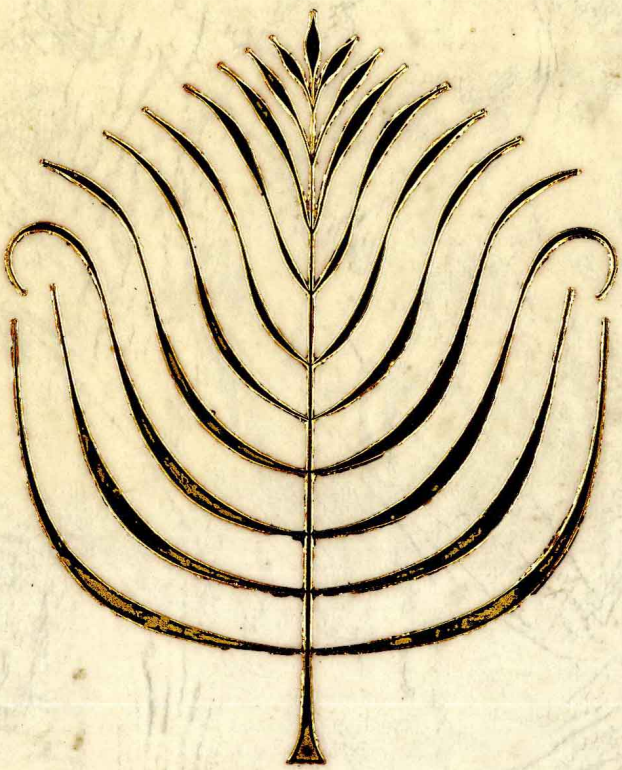
昔話の本質

—むかしむかしあるところに—

マックス・リューティ著

野村 泫訳

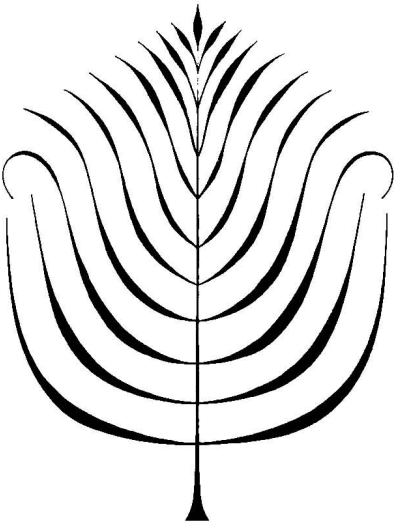


昔話の本質

—むかしむかしあるところに—

マックス・リューティ著
野村　泫訳

福音館書店



ISBN4-8340-0431-7

昔話の本質—むかしむかしあるところに—
一九七四年九月一五日　初版発行
一九八五年一〇月三〇日　第四刷
訳者　野村　泫
発行　福音館書店
東京都文京区本駒込六丁目六番三号
電話　営業部（〇三）九四二—一二二六
編集部（〇三）九四二—二〇八一
振替　東京五—一一七六四五
印刷　精興社
製本　小林共文堂
・乱丁・落丁本は送料小社負担にてお取り替えいたします。
・NDC九〇一／二四〇ページ／二〇センチ

ES WAR EINMAL…Vom Wesen des Volksmärchens
by Max Lüthi

© Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, Germany.
Japanese language edition published in 1974 by
Fukuinkan-Shoten, Publishers, Tokyo.

日本語版のまえがき

昔話は独特な世界文学です。多くの昔話が世界の大半をめぐり、移り変わる時代を通り抜けてきています。そういう話は何度となく異なった環境に適応して外形を変えてはいますが、構造、様式、モチーフなど、主要な点では元のままです。この驚くべき不変性は、昔話が時を越え所を越えて人間の心に合致していることを示しています。それは、さらにまた、昔話が単なる願望の夢ではないことを示しているでしょう。それどころか、昔話に出てくる人物には、人間は自分自身と外界に対してどんな態度をとることができるか、という重大な人間の可能性が反映しているといえます。だから、昔話の秘密を少しでも解き明かそうとして、絶えず新しい試みが企てられるというのは、当然のことなのです。

この本は主にヨーロッパの昔話を扱っていますが、ヨーロッパの昔話がほかの大陸の昔話から大きな影響を受けていることを、見落としてはいません。ですから、この本の日本語訳が出ることは、私には大変うれしいことなのです。ちょうど五年前に日本語訳の出た、「ヨーロッパの昔話」は昔話の一般的な理論を究明したものですが、この本は特徴のある昔話、昔話の主要な型を示す話に目を向けています。深い専門の知識を持つ野村教授が、細心の注意を払ってこの本を日

本語に移してくださったことに、心から感謝いたします。

一九七四年　春　　チューリッヒにて

マックス・リューティ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まえがき

この本に収めた昔話の考察は、はじめラジオ・ベーロミュンスター〔スイスの公共放送〕から連続して放送されたものである。したがって、はじめから広い範囲の人々を聞き手として考えていた。つまり、お母さん、お父さん、教育に携わる方、さらには、昔話がとにかく好きだとか、昔話には謎のようなところがあると首をかしげている方々に語りかけたものである。本になっても、目差すところは変わらない。例をいくつか選び、その例に即して昔話の特質を明らかにしたが、常に実例をして語らせる、というやり方をとった。昔話を伝説や聖者伝と比べたのは、伝説と聖者伝が昔話と同じように、奇蹟の雰囲気を漂わせているからである。最後の章では、奇蹟とか不思議なことが文学一般の中で果たしている役割を探った。

むかしむかしあるところに……という文句ではじまる昔話は、今ではもう昔と違って、口から口へ伝えられたり、大人たちの間で語られることはないが、人気は少しも衰えていない。子どもには心の糧としてふさわしいものであるし、学者や芸術家は昔話を文学の原型と考えている。

「真の昔話は、私たちを時間と空間からばかりでなく、死すべき運命からも解き放ってくれる。私たちは昔話を通じて霊の国へ入る。」とヘルダーは言っている。しかし、この霊の国には自由

と拘束がともに存在する。昔話は現実の世界が加える圧迫や支配から人を解放するが、また一方では整然とした世界を築いて、そこへ聞く人、読む人を迎え入れる。「賢い百姓娘」の型に属する近代ギリシャの昔話は、主人公に次のような質問を向けている。「世界中で一番速いものは何か？」「考え、です。なぜなら、私たちはここにいるのに、私たちの考えはアメリカに着いていますから。」と賢い娘は答えている。昔話には、思考と空想の自由がある。とはいえ、決まりがないわけではない。その思考と空想は一定の規則にしたがっている。この規則に目を向け、これをはっきり理解することによって、単純ではあるが奥深い昔話の本質に迫ろう、というのがこの本の目差すところである。

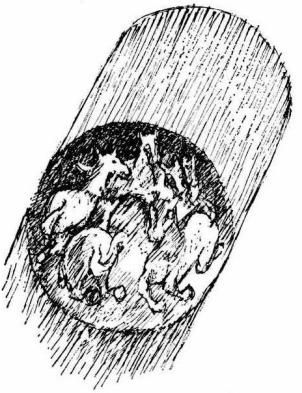
昔話の本質

―むかしむかしあるところに―

目次

日本語版のまえがき
まえがき
第一章　いばら姫
昔話の意味と外形……9
第二章　眠る七人の聖者
聖者伝—伝説—昔話……33
第三章　竜殺し
昔話の文体……53
第四章　地の雌牛
昔話の象徴的表現……71
第五章　生きている人形
伝説と昔話……93

第六章　動物物語
自然民族の物語……115
第七章　ラプンツェル
昔話は成熟の過程を
描いたものである……141
第八章　謎かけ姫
策略、諧謔、才智……159
第九章　昔話の主人公
昔話の描く人間像……181
第十章　文学における奇蹟……201
参考文献
訳者あとがき
装丁　堀内　誠一／カット　石川　勇

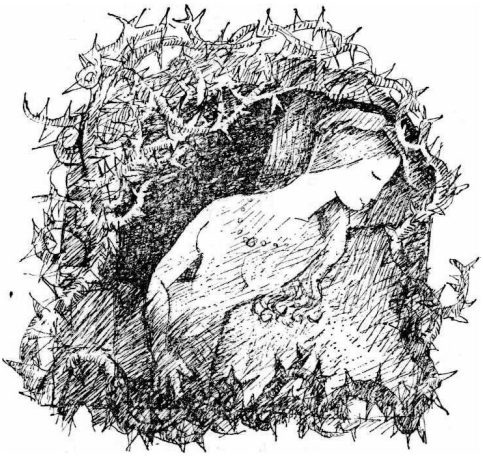


本文中の＊印は各章の終わりの訳者注を見て下さい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第一章　いばら姫

昔話の意味と外形



Märchen（メーヒェン）（昔話、おとぎ話）に対する人々の態度は二つに分かれている。„Erzähl mir keine Märchen!“（おとぎ話はよしてくれ）と言うときには相手を見下げているのだし、この場合 Märchen という言葉は「うそ」、「手の込んだうそ」を婉曲（えんきょく）に言いあらわしたものである。そうかと思うと、すばらしいものを見たときなど、ひとりでに „märchenhaft“（おとぎ話のようだ）という言葉が出てくるが、この場合は「真実に反する」という意味でなく、「この世のものとは思えない」という意味で使われている。こうして Märchen（メーヒェン）をさける気持と Märchen（メーヒェン）にひきつけられる気持は言葉の使い方にまであらわれている。

数百年の間、昔話は子ども部屋や召使の部屋で語られる話として、教養ある人々からは軽く見られてきた。ところが、すぐれた作家たちは昔話から繰り返しインスピレーションを受けてきている。創作文学はどんなに傾向の異なった時代にも昔話のモチーフを取り上げたし、昔話風の空想を思う存分広げていることが多い。個人の生活にも、昔話にひかれる時代と昔話から離れる時代とがある。「昔話の年令」というのは本来五歳から十歳までの間を指すが、その時期が過ぎると今度は昔話を嫌い現実に即した話を好む時期がやってくる。そして死ぬまでこの態度が変わら

ない人もいるし、後になって昔あれほど好きだった物語への愛と理解を取りもどす人もいる。何も、当人が母親になったり、祖父になったりして自分で昔話をしてやらなくてはならないから、というばかりではない。改めて昔話の独特な魅力に取りつかれるからなのである。

これほどはっきり人の心をひきつけたり、突きのけたりするとなれば、それはきっと本質にかかわる問題にちがいない。いずれにしても充分な検討が必要である。昔話が子どもの生活の中で演じている役割、昔話が本のない時代に何千年にもわたって大人たちの間で演じてきた役割が、昔話は特別な種類の文学であり、人間そのものにかかわる文学である、という仮定を支えてくれる。

昔話というと、今ではひとりでにグリム兄弟の昔話集が心に浮かんでくる、それは何もドイツ語圏だけのことではない。グリムの「子どもと家庭のための昔話」は、一八一二年に第一巻が、一八一五年に第二巻が初めて出版されたものであるが、多くの国々で最も人気のある、最も多く印刷されるドイツ語の本である。またこの本は自然民族（ナツウールフオルク）の間ですら威力を発揮している。宣教師によって黒人に伝えられたグリムの昔話が、その土地にもとからある話を押しのけてしまう場合がよくある。「いばら姫」〔KHM 50〕*はグリム昔話集の中で最もよく知られた話のひとつであるが、これからこの話に基づいて昔話の根本的な特徴をいくつか取り出してみることにする。話は次のように始まっている。

昔、王と后があった。二人は毎日、「子どもが欲しいなあ。」と言い暮らしていた。だがいつまでたっても子どもはできなかった。ところがあるとき、后が水浴びをしていると、蛙が水から陸へはい上がって、后に言った。「あなたの望みはかなえられますよ。一年たたないうちに、あなたは女の子を産むでしょう。」蛙の言った通りのことが起こって、后は女の子を産んだ。その子があまりきれいなので、王様はすっかりうれしくなり、大宴会をもよおした。王様は親戚や友だちや知り合いばかりでなく、福を授けてもらおうと思って巫女たちも宴会に招んだ。その国には巫女は十三人いたが、客に出す金の皿が十二枚しかなかったので、一人招ばれないことになった。宴会は、たいそう華やかに行なわれた。会が終わると、巫女たちが子どもにすばらしい贈り物をした。一人が徳を贈ると、もう一人が美しさを贈り、そのまた次の人が富を贈る、といった具合にこの世で望ましいものがすべて授けられた。十一人がまじないを言い終わったとき、突然十三番目の巫女が入ってきた。自分だけ招ばれなかったので仕返しに来たのだ。居並ぶ人には挨拶もせず、目もくれずに、大声で叫んだ。「姫は十五の年に紡錘に刺されて死ぬがよい。」それだけ言うと、踵を返して広間を出ていった。みんな肝をつぶしたが、そのとき十二番目の巫女が進み出た。この人はまだ願をかけていなかった。しかしこの人にも呪の言葉は取り消すことができないから、弱めるよりほかに仕方がなかった。そこで「姫は死ぬので

周囲の世界も栄える――この昔話は死と復活を物語っているのだ。死んだように横たわっている大地も春になると以前と変わらずに若々しく美しく新たな命に目覚め、生き生きとしてくるが、ばらの生垣の開花や眠っている姫の目覚めは、そういう大地を思い起こさせる。いばら姫の話には、永遠に繰り返される出来事があらわされている。人間を取り巻く自然界の出来事ばかりでなく、人間の心の中の出来事もあらわされている。いばら姫は十五歳のときに魔法にかかるが、十五歳というのは子どもから乙女（おとめ）への過渡期にあたる。大きな発展の境目に立ったり、人生のある段階から別の段階へ移っていくときには、人はきまって危険にさらされるような気がする。この年頃の少年が自分のことを反省したり、少女がもの思いにふけったりして、男の子も女の子もしばらくの間内気にはにかんだり、とげとげしく逆らったりはねつけたりするが、これはごく自然な現象である。まるでいばらの垣が若い人々の囲りに生えて、外部から隠すようだ。こうしてひきこもった生活に守られているうちに、若い人は次第に成熟し、一層力強く明るい新たな生活に目覚めるのである。

昔話に出てくる人物は個人として描かれてはいない。昔話には個々人の運命は描かれていない。あの話の筋に反映しているのは成熟期に一度だけ起こる出来事なのだ、とも言いきれない。いばら姫の話は、若い娘の物思いが恋する若者の手によって解かれる様を空想にまかせて描いた一編の恋物語、というだけのものではない。人はまたおのずから姫を人間の心の象徴と取らずにはい

られない。この話はひとりの娘が才能を恵まれ、脅かされ、麻痺し、救われるところを描いているばかりでなく、それをあらゆる人間に通ずる問題として描いている。人間の心は幾度となく痙攣や麻痺に陥るが、うまくいけば、また何度でも元気になり、癒され、救われる。ただし、うまくいけば、の話である。自分の内部に生命の泉を見出したり、周囲の世界との接触をふたたび見出すことができなくて、麻痺の状態が異常に長く続くこともちろんある。けれども昔話が描くのは異常な場合でなく、自然な発展である。そして昔話は、昔話を受け入れる人々の心を、死の眠りのあとには一層力強い新たな命がよみがえり、孤独のあとには新たな形の接触や連帯が生まれる、という信頼で満たす。

こういう恵みとおどしはいばら姫の話の中でいろいろと形を変えて繰り返し描かれている。仙女はこの子にとって祝福ともなれば呪ともなる。王様の城はいばら姫には天国でもあれば牢獄でもある。死の眠りは追放でもあれば保護でもある。いばらの垣は人を殺すこともできるが、しまいにはすばらしい花を咲かせる。このいばらの垣があらゆるものに滲透っている死と復活の両極性を一番はっきりと形にあらわしている。

城と塔、とげとばらの花、人間と仙女といったような今のべたばかりの主要な事物には、さらにまた昔話の特別な働きがあらわれている。それは何もいばら姫の話だけに限られたものではなく、昔話全体に通ずるものである。昔話は短いながらそれなりに世界を包括している。つまり、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com